

Sincerity④

校長 菊田勇雄

処暑過ぎしところに残暑見舞ひけり (吉田 島江)

8月23日は二十四節気の一つ「処暑」でした。暑さが一段落して、朝の風や夜の虫の声に、秋の気配を感じる頃とされています。今年の夏、梅雨寒の日が長く続きましたが、梅雨明け後は昨年同様、猛暑となりました。報道では「災害級の暑さ」という言葉も使用されました。ようやく暑さも峠を越した感がありますが、まだまだ残暑の日もあることから、油断はできません。急激な気温や気圧の変化から来る「寒暖差疲労」にも注意したいところです。しっかり食事を摂り、睡眠時間を確保して、体調を整えながら毎日を過ごしたいと思います。26日に2学期が始まりました。夏休み中は静かだった学校も、生徒諸君のみなぎる若さで活気に包まれています。



■ 2学期がスタートしました

8月26日、2学期がスタートしました。長い夏休み、生徒諸君は夏季課外、強化学習会、海外研修、ブリティッシュヒルズ研修、ボランティア活動、部活動など様々な活動に取り組み、自己研鑽に努めました。大切なのは、夏休み中に経験したこと、身につけたことをさらに確実なものにし、将来の飛躍につなげることです。始業式には私からそのことを伝えるとともに、学年ごとに取り組みべき事柄を示しました。3年生は何と言っても進路決定に向けた取り組みに全力を傾けること、必死に取り組み姿を後輩達に見せることを話しました。2年生には中堅学年としての自覚、学習に取り組み姿勢について伝えました。1年生には学習習慣の回復、基礎的な学習内容の確実な定着に全力を尽くすことを伝えました。生徒諸君には気持ちを切り替え、よいスタートを切ることを期待しています。若駒たちよ！飛躍の2学期に。

孫其昌の来日について

昭和10（1935）年、孫其昌は満州国財政部大臣として視察のため初来日しました。視察団一行（総勢10名）の動向について、防衛省防衛研究所所蔵「満州国財政部大臣一行見学の件」「東京朝日新聞」「外交時報」等の資料から再現したいと思います。

9月29日に新京を出発した一行は、釜山から関釜連絡船で下関に上陸したあと、特急富士で東京に向かい、10月1日午後に着きました。2日に岡田啓介首相、3日に広田弘毅外相、4日に高橋是清蔵相を訪問しています。当時、日本と満州国との間の通貨制度の安定が喫緊の課題となっており、その点について意見交換が行われたようです。8日には宮中に参内し天皇陛下に謁見しています。その後、所沢の陸軍飛行学校と被服本廠、横須賀の軍港と工廠などの軍事施設、かつて留学した東京高等師範学校を訪問しています。14日、東京を離れた一行は箱根、名古屋、奈良、京都、大阪、神戸、広島に立ち寄り、伊勢神宮・清水寺・宇治平等院・厳島神社などの名所、大阪造幣局・神戸税関などの政府機関、住友金属工業・川崎造船所飛行機製作所などの軍事工場を訪問しました。28日、視察を終えた一行は再び関釜連絡船で帰路につきました。

ところで資料に目を通して気づいたことは、一行の視察に関東軍が深く関わっていること、通貨問題の折衝が満州国の邦人官僚、関東軍財政顧問、大蔵省当局の間で進められたこと、の2点です。やはり、傀儡国家としての満州国の位置づけを思わずにはいられませんでした。ともあれ、来日した一行は多数の関係者と交流し、縁故者の訪問も受けていることから、その中に相馬中学の同窓生がおり、孫に揮毫を依頼したのではないかと推測しています。



孫其昌の署名のある「教育人材」の揮毫



■ スクールガイダンスが行われました

夏季休業中の7月29日、本校のスクールガイダンス（体験入学）が行われ、中学3年生255名、保護者49名、引率教員12名の参加がありました。全体説明会では、私から本校の教育活動、進路状況、高校入試について説明いたしました。生徒を代表して生徒会長の中塚涼太君の挨拶があり、続いて生徒会役員による学校生活・生徒会活動紹介が行われました。また、1年生を代表して普通科の青田治登君、理数科の島田愛莉さんが体験談を披露しました。全体終了後、体験授業が行われ、参加者は国語、社会、数学、理科、英語に分かれ、本校教員による生きた授業を体験してもらいました。その後、生徒の案内で参加者には校舎と部活動を見学してもらい、正午には全日程が終了しました。暑さの中、参加していただいた皆さんにはあらためて感謝申し上げます。本校の教育活動や魅力ある学校づくりを今後の進路選択の参考にしていただければ幸いです。また、ご協力いただいたアンケートの結果は概ね良好でしたが、いくつか工夫を必要とする点もありましたので、ご意見を参考に来年に向けて検討したいと思います。



地域貢献活動に取り組んでいます

夏季休業中の地域貢献活動についてご紹介します。7月26日、妙見中村神社で行われた相馬野馬追の宵祭りにおいて、太鼓部の生徒が演奏を披露しました。「相馬野馬追出陣太鼓」と「相馬の宵」の二曲を力強く演奏して祭りを盛り上げ、皆さんに喜んでいただきました。8月17日、相馬市民会館等で行われた相馬市子ども科学フェスティバルには、科学部を中心に38名の生徒が参加しました。特に科学部による実験体験コーナーは大盛況でした。子どもたちは、マイナス196℃の液体窒素で花やピンポン玉を冷却し、その変化を観察したり、ミラクルフルーツを口に含んで味覚の変化を体験したり、科学の不思議を楽しみました。その他にも、相馬市観光協会主催の盆踊り大会や、障害者支援施設の夏祭り等の運営ボランティアに参加し、多くの生徒たちが地域貢献活動に取り組みました。地域の方々の役に立ちたい、そのために何かをしたいという気持ちは、まさに「利他」の心であり、それは校訓の「至誠」に通じるものです。地域貢献活動は生徒たちの視野を広げ、自分自身を鍛え、心を耕すことに繋がることから、今後も積極的に取り組ませたいと思います。



相馬市子ども科学フェスティバルで子どもたちに説明する本校生

海外研修の経験を今後にかそう

夏季休業中、海外研修に参加した生徒諸君を紹介します。

まず、「日英サイエンスワークショップ」に参加した高橋茉花さんと長谷暁美さんです。二人は他校の生徒と共にイギリスのロンドンにおいて二週間に及ぶ研修を行ってきました。現地大学での講義や討論研修、ケンブリッジ大学での研修や震災シンポジウムでのプレゼンテーション、現地高校生との交流等、多岐にわたる活動を行ってきました。



日英サイエンスワークショップの参加者

また、「ふくしま浜通りハイスクール・アカデミー2019」に参加した佐藤江利華さん、但野友香さん、門馬右恭君、蔭山愛乃さん、室井瀬奈さんの5名です。5名は他校の生徒と共にイギリスにおいて、二週間に及ぶ研修に参加しました。イギリス北西部にある原子力複合施設セラフィールド訪問し、原子力発電所の廃炉行程、研究・研修施設、教育・学習施設の実際を学び、福島復興を考えるワークショップに取り組んできました。海外研修に参加した生徒諸君には、貴重な経験を将来の自分の進路実現にかすとともに、級友や後輩にその感動を伝え経験を共有して欲しいと思います。

「若人の像」が問いかけていること

本校の正門を通り右手に歩みを進めると、ロダンの「考える人」に似た「若人の像」があります。これは昭和38年度卒業生から記念に送られ、前庭に建立されたものです。ロダンは19世紀に活躍したフランスの彫刻家。「近代彫刻の父」と言われ、その作品は世界中の人々を魅了しています。「考える人」はイタリアの詩人ダンテの『神曲』地獄篇をもとに作成されました。ロダンが「地獄の門」の中央扉の上で、地獄の様相を眺めながら思索に耽る詩人の姿として構想したのが「考える人」で、やがて岩の上に腰をおろし夢想する裸の男の彫刻として発表されることになりました。鑄造された作品は世界各地に存在し、上野の国立西洋美術館の前庭にあることはよく知られています。その姿は人間の悲劇的な運命について、永遠に思考を続ける普遍的な存在となりました。卒業生が「若人の像」に何を託したのか、記録が見当たらず分かりませんが、現代にも通じるメッセージを読み取ることができると思います。それは今ほど「自分の頭で考えること」の大切な時代はないからです。私たちは分からないことがあればインターネットで瞬時に情報を得ることが出来ます。また、人工知能(AI)が人間に代わって様々な情報処理や判断をしてくれるようになりました。AIが人間の仕事を奪うのではないとも言われています。しかし、こういう時代だからこそ、人間にはできない価値の創造や、問題の発見と解決を行わなくてはなりません。そのためには私たちが自分の頭で考える力を身につける必要があるのです。「人類の将来を担う若者が思考力を身につけ、時代を切り拓いて欲しい」と前庭に佇む「若人の像」が語りかけてきそうです。



前庭の若人の像



西洋美術館の考える人

同窓生列伝④ 折笠晴秀(1885-1965) 続編 ～地域社会の指導者であった父晴吉～

折笠晴秀の父晴吉は、弘化3年(1846)年生まれ。若い頃、相馬藩の儒者である錦織晩香に学び、長じて家業を継いで農業に従事したが、明治9年、村役場の書記となり、明治15年以降、学務委員、勸業諮問委員、村会議員等の公職を歴任した。また、明治33年から38年までの約6年間は福浦村長(現在の南相馬市小高区)を務め、地域社会の指導者として数々の功績を残した。特に双葉郡との連絡道路の改修工事では、調査委員会を立ち上げ、綿密な調査結果にもとづき対象となる村道選定を行いました。また、村議会に土木費予算を計上し、県と郡からの補助金も確保するなど財政面での対応も確実に行っています。道路改修については村民の多くが困難と考えていましたが、晴吉は地域の発展には村道改修が不可欠であるという信念を貫き、明治35年度から4年にわたる大工事を成し遂げました。その結果、交通の便が良くなり、車馬の往来は頻繁となり、大成功をおさめました。この大事業は『一身を顧みず彼にしてはじめてなし得たものである』と「小高町史」は記しています。晴吉は明治37年に村長に再選されますが、任期途中の翌38年、病気で亡くなりますが、明治37と38年に日露戦役の功により勲七等青色桐葉章を受けていることから、晴吉の病没と日露戦争への従軍には何らかの関係があるのではと推測されます。晴秀は父の姿を見ながら成長し、その素質は彼に引き継がれることになりました。後に馬城会の設立に参画し、昭和14年に会長に就任したことは、その証左と言えるでしょう。